

## 中国抗日時期文学の構図

— 国民党系文化潮流の視角から

阪 口 直 樹

## 一、「左連」時期文学研究の問題

一九六六年から一〇年に及んだ「文革」（プロレタリア文化大革命）はその過程で数多くの否定的な文学事象を顕在化させ、その後我々の研究態度及び方法に再検討を迫ったが、私の場合、問題意識の明確化は一九八一年の「文学史観」と「文学的事実」のはざま——新版各種『中国現代文学史』を考察する<sup>(注1)</sup>をきっかけにしたように思う。これは『野草』が特集した「中国現代文学史」諸本の検討<sup>(注2)</sup>にあわせて執筆したものだが、三〇年代に焦点をあてながら、各種文学史が特定の文学史観によって、文学的事実の不正確な叙述を生み出していることを指摘したものであった。その後この問題は、田仲済「修訂再版後記」<sup>(注3)</sup>における阪口批判、拙論『中国現代文学史』（田・孫本）修訂版について——あわせて「再版後記」に答える<sup>(注4)</sup>による反論と継続していったが、私はその経過をふまえて、「国

「国防文学論争」における「文学的事実」に的をしぼった、いくつかの文章を書くことになった。そのなかで例えば、「国防文学派」なるものも、周揚ひとり为代表的立場にいたわけではなく、徐懋庸、周立波さらには傅東華、茅盾といった多くの作家たちが、相互に変化しあい、影響を与えあいながら形成されていった過程が明確になってきたし、<sup>(注4)</sup>また「国防文学論争」における矛盾の動きも、当時関わっていた大型雑誌『文学』に対する社会的圧力や魯迅との複雑な関係という状況下で、当初の傍観者の立場から、「国防文学派」へ、さらに「調停派」へとめまぐるしくその態度を変化させていったことも明らかになってきた。<sup>(注5)</sup>これらの事実は、「左連」をめぐってこれまでの固定的な価値観、すなわち魯迅⇨善、周揚⇨悪とか、「国防文学派」対「民族革命戦争的大衆文学派」とかいった固定的・図式的把握ではなく、作家たち相互の「関係性」視点を導入することの重要性を浮び上がらせてきたといえる。またこの観点は、単に作家個人間に適用されるものではなくて、「左翼文学・都市の文学・民族主義」文学の三派鼎立<sup>(注6)</sup>状況にあつた三〇年代文学において、いくつかの文学流派間にも拡大適用が可能となるだろうし、とりわけ左翼文学が国民党（中国国民党）系文化潮流との競合と対立を強制された状況下においては、両者の「関係」的観点を導入することなしに、文学状況はその像を明確にしてはこないにちがいない。

## 二、国民党系文化潮流を再評価する意義

三〇年代「左連」の敵対的勢力となつた国民党系文化潮流は、これまで「左連」側の反撃によつて、「一年をへずして国民党が苦心惨憺のうえ作り上げた『民族主義文芸』運動は徹底的な破産を宣告された。」<sup>(注7)</sup>とされてきたが、問

題がそれほど単純でないことは、新村徹が七〇年代にすでに「この『闘争』は三〇年代のどこかで終止符を打たれたということではなく、左連解消の後まで長く継続されたものと解してよい。」<sup>(注8)</sup>と指摘していたし、八〇年代の中国でも、蔣洛平が「三十年代から四十年代にわたり、『民族文学』は三回提唱された。一回は『左連』が成立し、左翼文芸運動が大きな発展を獲得した時、二回目は文芸界抗日救亡運動と抗日民族統一戦線が澎湃として発展しだした一九三七年初、三回目は一九四二年前後の反共の高潮においてである。……これを『民族文学』『発展』『曲線の三つのピーク』とみなすほうが、これをお互い無関係な三つの孤立した文学現象とみなすよりも、いつそう真実に近いであろう。」<sup>(注9)</sup>と、これまでの「左連」による早期絶滅説をくつがえし、国民党系「民族文学」が抗戦時期を一貫した「流れ」であったことを指摘しはじめるようになったが、なお総論的提示という段階にとどまり、個別研究の深化がともなわない大状況に変化はない。その直接的原因はもちろん政治的あるいは資料的制約の大きさにあるが、私はむしろ「方法論」上の問題を指摘したいと考えている。

上海における「民族主義文学運動」の拠点となった『前鋒周報』は一九三〇年六月二二日創刊され、翌年一九三一年五月三十一日に停刊するが、この雑誌に対して「左連」側は、茅盾・瞿秋白・魯迅らが反撃し、また当時「左連」と論争していた胡秋原ら「自由人・第三種人」グループも批判を行った。だが奇妙なことに、「左連」の『文学導報』での反撃は一九三一年八月二〇日から十一月一五日まで、胡秋原『文化評論』の批判特集も一九三一年十二月であり、『前鋒周報』『前鋒月刊』はすでに廃刊されていたのである。この矛盾は辛島驍氏が早くから触れているように、「宣伝部」系と「組織部」系という国民党内部の派閥的要素と、「少なくとも満州事変の勃発までは上海と南京の二カ所に中国文壇があった。」<sup>(注10)</sup>という文学地理的観点を導入することによって初めて理解可能となるのではないだろうか。

例えば、「組織部」系グループの動きを見ると、『前鋒週報』『前鋒月刊』が廃刊後、黄震遐の『大上海的毀滅』が上海で好評連載を続けたほか、主要拠点は杭州に移り、黄鐘文芸社『黄鐘』（一九三二年～一九三七年五月）や『民族文芸論文集』（杭州正中書局 一九三四年八月）など継続的に活動が展開されたが、他方「宣伝部」系グループの活動は、さらに大規模かつ長期的であった。

南京を拠点とした「宣伝部」系は、王平陵を中心に「中国文芸社」を結成し、『文芸月刊』（一九三〇年八月一日～一九四一年一月）を一〇年にわたって発行することになる。<sup>(注1)</sup> 王平陵らの影響は、その後武漢にも大きな影響を与え、胡紹軒や魏紹徴らが「武漢文芸社」を成立させ、武漢『文芸』月刊（一九三五年三月一日～一九四八年三月一日）を出版させるに至り、「文協」（中華全国文芸界抗敵協会）成立にあたって、国民党側作家の結集母体となっていた。<sup>(注2)</sup>

一方、上述の文学運動と平行して展開された国民党文化政策が、正式に確定したのはそう早くはない。一九三八年三月三十一日に国民党臨時全国代表大会で承認された「確定文化政策案」が、文献上で見ることの出来る最初のものだが、そこで示された「出版學術奨励」、「検閲制度の強化」などの文化出版政策は、その後抗日戦争の激化にともない、具体化されていくのである。

それは、農村部においては「文化中心根拠地」、「文化饗応站」が組織化され、壁新聞・小型新聞（油印）・小冊子などの普及活動の展開として現実化していったし、都市部においては、正中書局、独立出版社、中国文化服務社などの直轄出版社による出版活動や「文運會」（国民党中央文化運動委員會）を通して、講演など文化活動、戯曲上演の奨励や、左翼作家の経済援助による「取り込み」として展開されていった。国民党宣伝部長張道藩が発表した「我們

所需要的文芸政策」(一九四二年九月)の直接的なきっかけが、毛沢東「文芸講話」(一九四二年五月)への対抗にあつたように、国共合作のなかで両党は文化政策の全戦線においてきびしい対立と競争をくりかえしたのである。<sup>(注13)</sup>

こうして国民党文化運動の流れを、上海、杭州、南京、武漢、重慶、昆明といったかたちで「共時的」に把握することは、三〇年代から四〇年代にいたる中国文学の独特性を理解するための重要なキーポイントとなるにちがいない。もう少し広げていえば、これまで一九二七年から一九三六年までを「三〇年代文学」、一九三七年から一九四五年までを「抗戦時期文学」と分断的に把握されてきた時期区分は、むしろ日本侵略拡大が迫った民族的課題を基準として、一九三〇年から一九四五年をひとまとめにした方が、この時期の特徴を「共時的」に理解できるのではないだろうか。そのためたとえば、「抗日時期文学」といった、より広い時期区分概念を導入することも考えよう。

### 三、五四新文化運動の対抗的潮流としての文化ナショナリズム

政権政党としての国民党は、その官僚機構に大量の知識人を抱え込んだが、そのほとんどはアメリカ留学経験者であった。清末から清華学校(後の清華大学)を中核として大量の留学生がアメリカに送り込まれ、その数は一九二九年までに一九〇〇名にのぼつたという。<sup>(注14)</sup>そして彼らが帰国後中国で得た就職先は、教員、技術者および実業家の三部門に集中し、そのうち大学教授・教育家の分野は三四・四%を占めたといわれる。<sup>(注15)</sup>彼らは留学中に獲得した近代的な技術や思想を、国民政府の官僚機構のなかで生かすことになったが、それは国民党文化政策を立案し実施する立場に自らを置くことを意味した。

人文系を専攻した在米中国留学生の多くが、国際主義ではなくナショナリズムに傾向したのは注目すべき現象である。それは例えば、一九二五年七月、在米留学生によって結成された「大江会」（梁実秋、聞一多、羅隆基、吳景超など二九名）や、「神州会」（同年結成、邱椿、劉師舜など）などの「国家主義」的団体に見ることができるし、<sup>(注16)</sup> 吳宓、梅光迪、胡先驕らが、アメリカ留学中にバビット (Irving Babbitt) の「新ニューマニズム」の影響を受けて結成し、「封建復古主義を鼓吹し、新文化運動に反対した」と批判されてきた「学衡派」も、同様のナショナリズム的潮流に属するものであった。そして抗日戦争が激化するなかで、アメリカ留学経験者は、ナショナリズム的側面を強化するかたちで世論をリードしていったのである。

一九三五年一月一〇日、一〇名の教授によつて「中国本位的文化建設宣言」が発表された。これは当面する国家の危機にあつて、国民党の主導の下で、折衷主義的立場から中国独自の文化創造を呼びかけたものだが、署名者のうち四名（何炳松、章益、孫寒冰、黄文山）がアメリカ留学出身者だったことは象徴的であつた。ここで注目すべきは、商務印書館や暨南大学で重要なポストにあつた文化界の重鎮・何炳松が、アメリカのロビンソン (James Harvey Robinson) から学んだ文化史的方法——総体性、連続性、因果関係を重視する総合史観、多元史観の具体化として、この「宣言」を中心的に策定し推進した<sup>(注17)</sup>ことである。

それから時期がずれた四〇年代初期の昆明で、「国民党特務政治を宣揚し、ファシズム思想を宣伝する文芸潮流が出現した」<sup>(注18)</sup>。この文学集団を「戦国派」というが、雷海宗、陳銓、林同濟らは、哲学としての英雄崇拜論、歴史学としての「文化形態史観」、文学創作としての「特務文学」、文学運動理論としての「民族文学」など幾つかの角度から、救国の方向を提示し、当時の国統区文壇に切り込んでいった。そのなかで雷海宗は、アメリカ留学中に学んだ、ドイ

ツ歴史哲學家シュペンゲラー (Oswald Spengler 1880-1936) の『西洋の没落』(Der Untergang des Abendlandes) が展開したパタナイズの手法を中国に適用し、西洋文化が「戦国時代」に突入し、大一統帝国へと向かおうとする時代にあつて、「中国が必ず亡ぶ」のではなく、西欧や日本に勝利するばかりか、西欧よりさらに高次元の大一統帝国を建設できるという展望を描いたのである。<sup>(注19)</sup>

またこれと時期を同じくして、伝統と現代の結合点を探し求め、世界文化系統における儒教の優位性を主張する「新儒家」運動が展開されたが、実はこの二つの文化哲学の潮流とは、「新儒家」が「柔性・尚徳の文化」を主張したとするならば、「戦国派」は「剛性・尚力の文化」を主張したと位置づけることができ、それらがある種の共通した思想的趣旨と文化体系を有した学術サロン・文化グループであり、……抗戦という特定の歴史時期における文化民族主義の一つの支流にすぎない。<sup>(注20)</sup> こうして一見対立する抗戦時期の二つの文化潮流も、二〇年代、三〇年代から継続する文化ナショナリズム潮流に位置づけることが可能となるのである。

#### 四、まとめ——「方法としての国民党」

私は、これまで空白におかれてきた国民党系文化潮流の視角から、中国現代文学史の諸問題に立ち向かおうとしてきたが、それは国民党の文化的復権のためではなく、「左連中心主義」といったこれまでの既成概念を打破し、歴史的相対化を図ろうとすることにあつた。それは竹内好の「方法としてのアジア」、溝口雄三の「方法としての中国」にたとえるならば、「方法としての国民党」とでも呼べるかもしれない。

一九三五年初発表された「中国本位的文化建設宣言」の発表の経過は、それが掲載された『文化建設』雑誌がトロツキズム等非国民党的論調を許容したことも含め、国民党が意外な包容力を持っていたことを示すことになった。知識人の引き寄せに成功し、世論をリードした国民党側に対して、「左連」側がおくればせながら行つた反撃が翌年の「国防文学」主張であった。このように国民党系文化潮流を基準におくことで、「左連」の積極的主導的活動という既成概念が相対化され、客観化されていくのである。<sup>(注21)</sup>

あるいはまた、茅盾の二つの作品『子夜』『腐蝕』においても「方法としての国民党」は有効であるかもしれない。三〇年代初頭の中国社会の実相を社会史的観点から描こうとした『子夜』は、中国リアリズム文学の頂点にたつものとして高く評価されてきた。だがこうした価値判断には、中国を「半封建・半植民地」とする毛沢東の規定、国民党を「封建的買弁的ファシスト寡頭独裁制度」とする陳伯達の規定が背景にあり、例えば四〇年代抗戦時期という強力なバイアスがかけられていたのである。最近の国民政府時期研究によれば、三〇年代南京国民政府が、①関税自主権の確立、②金融体制の整備、③公債発行による国家資本蓄積、④通貨統一など一連の経済改革を実施し、同政府が外国資本（と直結する買弁）に対する依存体質から脱却しようとした意志を認めることができ、当時の経済界は、買弁資本、金融資本、産業資本という三者の対立競争としてとらえることができるというのである。これと比較して『子夜』が買弁資本と民族資本家の二者対立として描いたことは、そのリアリズムの根拠に重大な問題を残すことになった。<sup>(注22)</sup>

さてもうひとつの作品『腐蝕』は、「女スパイ」趙慧明の非日常性と、心理描写を通して、国民党特務組織の実態を暴露したとされてきたが、国民党特務組織の実態と、茅盾の抗日時期における動きをみると、別の姿が浮び上がっ



てくる。すなわち、当時国民党の特務組織は「中統」と「軍統」の二大組織が対立と競合のなかにあったが、茅盾は「中統」系とはむしろ良好な関係にあり、彼らの文学組織「文運会」から金銭的援助を受け、その活動に積極的に参加したのである。他方、「女スパイ」のモデルは現実に存在した「軍統」系の女性であることも明らかになってきた。こうして国民党Ⅱ単一Ⅱ悪という単純図式が崩壊したとき、『腐蝕』と茅盾の活動に対するこれまでの評価が、大きく変更を余儀なくされるのである。<sup>(注23)</sup>

次に思想潮流の角度から見てみよう。国民党はその影響下に幅広い思想傾向を持つ知識人を擁したが、官僚として国民国家確立に責任を負った彼らの主流的思潮が、ナショナリズムにあったことは不自然ではない。これまで「復古・反動」として単純否定されてきたこの潮流は、新文化運動に敵対しながら、二〇年代から四〇年代を通してとぎれることはなかった。だがこの「文化保守主義」は、艾愷 (Guy Alitto) が主張するように、むしろ西欧の「反近代」的思潮の角度から再評価を試みる必要があるだろう。彼はヨーロッパ各国において、一八世紀末から発展した啓蒙運動と「ブルジョア功利文化」が次第に腐敗・解体し、深刻な道徳的・文化危機に陥る状況を分析し、「反近代」的思潮が、非理性、非功利（芸術、宗教など）的価値観と伝統的形式を重視する形で誕生していったこと、またそのためにこの潮流が常に「伝統的」「保守主義」とみなされる結果となった原因を明らかにし、中国の「反近代」的潮流を、辜鴻銘、梁啓超、梁漱溟、張君勱といった学者や「学衡派」「甲寅派」などの文学流派の一連の動きに見ようとしている。<sup>(注24)</sup> このようにして、国民党系文化潮流の角度から、五四以後の思想潮流に対する新たな見直しの必要性和正当性が顕現してくるのである。

八〇年代中国で提起されてきた、李沢厚の「救亡と啓蒙の二重変奏」や、汪暉の「三つの文化記憶方式」（文化批

判ないしは啓蒙主義的方式、民族主義ないしは文化保守主義的方式、新民主主義ないしは共産主義的方式<sup>(注25)</sup>などが結局のところ、①伝統↑↓反伝統、②救亡↑↓啓蒙、という二つの座標軸からの分析であったが、今やそのほかに③近代↑↓反近代という新たな軸をここで提示することができるだろう。

## 〔注〕

- (1) 『野草』二七号一九八一年四月。
- (2) 田仲濟・孫昌熙主編『中国現代文学史〔修訂本〕』山東文芸出版社一九八五年五月。
- (3) 『野草』三八号一九八六年九月。
- (4) 拙論「初期国防文学論争における徐懋庸の位置——論争」時期区分の試論をかねて『同志社外国文学研究』四五・四六合併号一九八七年二月参照。
- (5) 「茅盾と『文芸工作者宣言』」『野草』三〇号一九八二年五月、「『文学』と茅盾——国防文学論争にかかわって」『伊藤漱平教授退官記念中国論集』汲古書院一九八六年四月参照。
- (6) 「一九三〇年代概説」『原典で読む図説中国二〇世紀文学』白帝社一九九五年三月二〇日。
- (7) 『中国現代文学史』江蘇人民出版社一九七九年八月。
- (8) 新村徹「『民族主義文学』と左連」『野草』一四・一五合併号一九七四年四月。
- (9) 「関於『民族文学』——一個備忘的提綱」『重慶師範学院学報』哲学社会科学版一九八二年第四期。
- (10) 辛島驍『中国現代文学の研究』汲古書院 昭和五八年一〇月一日。
- (11) 「中国抗戦時期文学と『民族』——『国民党系』作家の再評価をめぐる(一)〜(三)」『同志社外国文学研究』五五・五八・六〇号一九九〇年一月〜一九九一年十二月。

- (12) 「中国抗戦時期文学と“民族”」(六)——武漢における“民族主義文学運動”の展開」『同志社外国文学研究』七十一号一九九五年三月。
- (13) 「中国抗戦時期文学と“民族”」(五)——重慶時期国民党の文化政策の展開と劉百閔の出版活動」『同志社外国文学研究』六十九号一九九五年一月。
- (14) 実藤恵秀『中国人日本留学史稿』財団法人日華学会 昭和十四年三月。
- (15) 阿部洋「義和団賠償金によるアメリカの対華文化事業」『米中教育交流の軌跡——国際文化協力の歴史的教訓』霞山会昭和六〇年十二月二〇日。
- (16) 楠原俊代「アメリカ留学生の肖像——大江会同人をめぐって(続)」『同志社法学』第二〇〇号一九八七年。
- (17) 「中国抗戦時期文学と“民族”」(四)——“中国本位の文化建設宣言”をめぐって」『同志社外国文学研究』六十八号一九九四年三月十五日。
- (18) 唐弢・嚴家炎編『中国現代文学史』人民文学出版社一九八〇年十二月。
- (19) 「『戦国派』作家陳銓の文学について」(『伊咄』二八号一九九五年二月)、「中国抗戦時期文学と“民族”」(七)——「戦国派」林同济・雷海宗の文化形態史観」(『同志社外国文学研究』七十三号一九九六年一月)。
- (20) 唐文権『覚醒与迷誤』上海人民出版社一九九三年二月。  
注一七参照。
- (21) 「『子夜』における“賈弁”の意味——南京国民政府と“四大家族”にかかわって」『野草』五四号一九九四年八月参照。
- (22) 「『腐蝕』の背景——茅盾と国民党『特務組織』」『未名』一一号一九九三年三月参照。
- (23) 艾愷『文化守成主義論——反現代化思潮的剖析』時報文化出版有限公司一九八六年一月。また許紀霖・陳達凱『中国現代化史(第一卷一八〇〇—一九四九)』(上海三聯書店一九九五年五月)でも、「文化保守主義的崛起」の項目を立て、その発生の原因と勃興の経過をまとめている。
- (24) 拙訳「民族主義的・文化保守主義的記憶方式からみた“五四・新文化運動”観」『野草』五〇号一九九二年八月。